

自閉症児における模倣指導によるルール習得に関する一考察

○金重和也

石井偲花

小笠原恵

(東京学芸大学特別支援教育特別専攻科) (東京学芸大学大学院教育学研究科)

(東京学芸大学)

KEY WORDS : 自閉症 モデリング ルール習得

【目的】 片桐 (2014) が「自閉スペクトラム障害の知覚・認知特性は、定型発達者よりも優れるものが存在する」と述べているように、自閉症は視覚優位の特性をもつものが多い。これまで、自閉症児を対象とした模倣を用いた指導で模倣を指導の手段として用いたものは少ない。牛山(1973)は、定型発達の幼児を対象として、模倣のためのモデリング刺激を用いてジャンケンを指導している。その結果、幼児にモデルをプロンプトとして機能させた。このことから模倣は、視覚情報・媒体を用いた指導の手段として有効であると考えられる。また、篁 (1977) は、自閉症児の社会的行動の中のルール理解のスキルが典型的に欠如していることを示した。模倣を用いた指導では、モデルを見て、模倣するという手続きであるため、様々なルールの指導に用いることができる。本研究では、単純なものの概念は形成されているが、課題のルールが理解できずに自分なりの誤ったやり方で遂行してしまう知的障害を伴う自閉症児の男児 1 名に対して、模倣を用いた介入によるルールの習得が可能か否かについて検討する。

【方法】 1. 対象児：H.W (以下、W 児とする)。指導開始時、H 中学校特別支援学級第 3 学年に在籍する 14 歳 9 か月の男児。診断名は、自閉症、ADHD。FSIQ : 48 (WISC - IV)。S A : 6 歳 4 か月、SQ : 48 (S-M 社会生活能力検査) であった。集団活動のゲームのルールを理解して活動を行えたが、複雑なルールになると自分のルールで行ってしまうこともあった。2. 標的行動：課題に正答すること。3. 指導デザイン：ABA デザインに準じたデザインを用いる。4. 指導手続き (1) 課題：課題として、机上課題、操作課題、動作課題の 3 種類を用いた。学習効果を防ぐため、毎回異なる課題を用いた。課題は、ルールがわからなければ正答できないものとした。(2) ベースライン期：W 児がルールの言語説明により正答するかを観察することを目的とした。(3) 介入期：ST の模倣により課題に正答することを目的とした。ST は、W 児が開始してから 10 秒後に課題を開始し、1 分で課題の取り組みを中断した。W 児が課題を完遂した場合、ルールを模倣したと判断した。5. 分析方法：各課題の正答率、ST を見た頻度及び課題の取り組み方の変更の割合について分析した。6. 信頼性：各フェイズにおける全体の観察の一致率は、98.1% であった。

【結果】 結果は図 1、図 2、表 1 で示した

【考察】 1. 課題の種類と正答率の関係性：正答率の平均値では、それぞれベースライン期①及びベースライン期②の平均値より介入期の正答率の平均値の方が高かった。このことから本研究で用いた ST がモデルとして課題のルールを呈示する介入が正答率を上げることに有効だったといえる。2. ST を見た頻度と課題の取り組み方の変更した割合の関係性：全課題における ST を見た頻度と取り組み方の変更の生起率においては、自力遂行があったセッションでは、ST を見る頻度が少ない傾向がある。全ての課題で課題の取り組み方の変更をしたセッションは、ST を見た頻度は高くなっている。これらのことから ST を見た頻度が高いほど、課題の取り組み方の変更が生じやすいという推測ができる。3. ST を見た頻度が高く、課題の取り組み方を変更したときの正答率：机上課題では、ST を見た頻度が高く、課題の取り組みを変更したときの正答率は、低いことが多い。操作課題においては、ST を見た頻度が高く、課題の取り組み方の変更のあったセッ

ションでは、高い正答率であった。動作課題では、ST を見た頻度が高く、課題の取り組み方の変更が生じ、正答率も高かった。全課題の総合では、セッション 3、14 で、正答率 50% を超え、比較的高い正答率を示した。ST を見て、課題の取り組み方の変更をし、正答したときには、モデルである ST が課題に対してルールをモデリングするプロンプトとして機能したといえるのではないか。本研究では、自閉症児に対し、課題のルールを呈示するために、模倣を用いた指導を行った。自閉症児に対してもモデルがプロンプトとして機能したと推測されるため、自閉症児にとっても模倣は、視覚情報・媒体を用いた手段として機能すると考えられる。

【結論】 本研究において、自閉症児にとって模倣が、視覚情報・媒体を用いた手段として機能することが示された。一方で正答率におおきなばらつきがみられるのは、課題の難易度や魅力度といった課題の設定が、関係している可能性がある。学習効果を防ぐため、毎回異なる課題を設定し、用いた。そのため毎回の課題の難易度が変わり、課題の設定が変数となったと考えられる。このことを確かめるためには、対象児の好む課題のアセスメントを行い、課題の魅力度を近づけ、難易度を統一した上で、もう一度同じ手続きを行う必要がある。

【文献】 1) 片桐正敏(2014)自閉症スペクトラム障害の知覚・認知特性と代償能力. 特殊教育学研究,52(2),97-105. 2) 篁一誠(1977)集団治療での諸問題(シンポジウム/自閉(症)児の行動変容,〈特集〉自閉症と行動療法). 行動療法研究,2(2),85-90. 3) 牛山聡子(1973)幼児の「ジャンケン」行動の生起に及ぼす代理強化と直接強化の効果. 東京教育大学教育心理学研究, 21(2), 79-89.

※対象児の保護者に本研究の参加と公開の承認を得た。

(KANESHIGE Kazuya, ISHII Shinoka, OGASAHARA Kei)

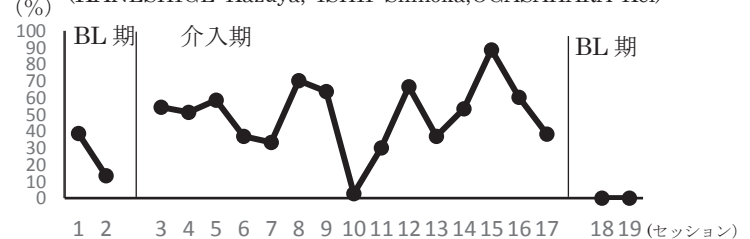


図 1. 総合正答率

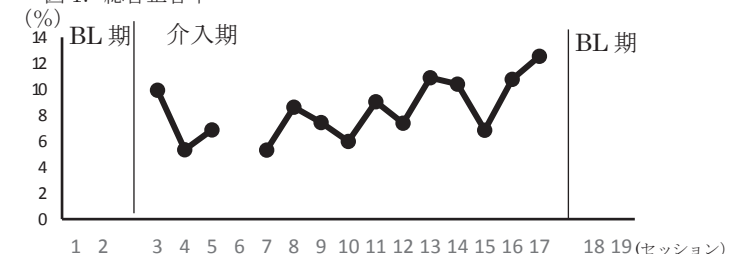


図 2. ST を見た頻度(セッション 6 は測定不能)

| セッション | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
|-------|---|---|-----|------|------|-----|------|------|------|------|-----|------|-----|-----|------|------|-----|----|----|
| 机上課題 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | × | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | ○ | | |
| 操作課題 | | | ○ | × | ○ | ○ | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| 動作課題 | | | ○ | ○ | △ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | ○ | ○ | ○ | △ | ○ | | |
| 生起率 | | | 100 | 66.6 | 66.6 | 100 | 66.6 | 66.6 | 66.6 | 66.6 | 100 | 66.6 | 100 | 100 | 66.6 | 66.6 | 100 | | |

○ : 取り組み方の変更あり
 △ : 取り組み方の変更なし (ST が開始するまで待機)
 × : 取り組み方の変更なし (ST が開始する前に開始)

表 1. 取り組み方の変更の生起率